2026 年 11 月 1 日　諸聖徒日　（マタイ 5：1～12）

憐れみ深い人々は、幸いである、その人たちは憐れみを受ける。　（マタイによる福音書 5 章 7 節）

毎年、この 11 月 1 日に近い主日には、奈良基督教会では諸聖徒日の礼拝がおこなわれております。関係逝去者のお名前が配られ、礼拝の中で最近 30 年間に天に召された方のお名前が呼ばれます。わたしがここに来た 2020 年 4 月以降だけを見ましても、50 名以上の方々のお名前が並びます。そしてそのお一人お一人との出会いや会話、いろんなことを思い起こす、それはきっとみなさんもそうなのだろうと思います。

わたしたちは、すでに天に召された方々を覚えてお祈りすることを大切にしています。きっと神さまのみもとで憩っている、その姿を思い起こしながら、お祈りをささげているのではないでしょうか。わたしたちには希望が与えられています。わたしたちは生きている間も、そして神さまの元に帰ったあとも、「わたしはいつもあなたがたと共にいる」とイエス様が語られた、その大きな希望が与えられています。わたしたちはその言葉を胸に、日々を過ごしているのです。

今日読まれた福音書は、このような言葉から始まっています。「イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た。そこで、イエスは口を開き、教えられた」。

「この群衆」という言葉があります。イエス様の周りにはどのような人たちが集まったのでしょうか。それは直前の 4 章 24 節に書かれています。「人々がイエスのところへ、いろいろな病気や苦しみに悩む者、悪霊に取りつかれた者、てんかんの者、中風の者など、あらゆる病人を連れて来た」。さらにこうあります。「こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ、ヨルダン川の向こう側から、大勢の群衆が来てイエスに従った」。

イエス様の周りに来たのは、イエス様にすがるしかない人たちでした。その姿は、愛する人を亡くしたときのわたしたちと、どこか似ているのかもしれません。自分の力だけでは歩くことの出来ない、そのようなときに、わたしたちはイエス様を求めます。そしてイエス様の言葉に聞くのです。

イエス様は山に登り、腰を下ろされて教え始められました。そして辺りを見渡し、ご自分の口から出る言葉をじっと待っている人たちに対して、このように語り始めたのです。「幸いだ、あなたがたは」と。

おとどい幼稚園の集まりで、能登の状況についての報告を聞きました。2024 年 1 月 1 日に起こった地震から、もう 2 年 10 カ月になります。その期間、世界中のあらゆる場所で自然災害が起こったこともあり、ニュースなどで能登のことが報じられる機会は本当に少なくなってしまいました。京都教区では能登の支援を続けるということで対策室を立ち上げています。先月 10 月 26 日から 29 日にも 4 人の方々が行ってきたそうです。このような活動は冬の期間を除いて基本的に月 1 回、これで 23 回目だと言われていました。そしてこのようなお話を聞きました。

地震が起きて 3 か月後、あるおうちに行ったときにそこで目にしたのは、物が散乱したままで何も片付けられていない状況でした。そこに住んでいる方はおられたのですが、何から手を付けるべきか、でも何も手につかない、そんな虚無感の中で過ごされていたそうです。そこでまず、ある一室で、畳が見える場所を

作ることにしたそうです。それは広いおうちの小さなスペースです。全体から見たら、本当にわずかな部分です。しかしまず、畳の一部がそこに見えることによって、わずかな光が差し込んだのでしょう。そこから少しずつではありますが、前に向かう力が与えられたということです。

ただそのときには半壊状態だったおうちも、7月に能登を襲った豪雨によって全壊の認定を受けてしまいます。それでも少しずつでも、わずかでも、光を見出し、そして少しずつ、一歩ずつ、前へと歩んでいく。それを支えていった活動だったそうです。

みなさんの中にも阪神淡路大震災や東日本大震災、そして熊本地震などのときに、現地に行って出来る限りの活動をしたり、離れた場所で支援をしたり、お祈りしたり、様々な形で関わった記憶があるかもしれません。ただ能登の場合、その交通の不便さから、なかなか復興が進まないのも事実です。もともと限界集落と呼ばれている地域では、いまだに電柱が浮き上がり、ガードレールがぶらぶらしている状況も見られるそうです。

イエス様は、もう歩くことができないと必死にすがる人々に対して、「幸いだ、あなたがたは」と語ります。目の前にいる人たちに対して、心が貧しく、悲しんでおり、柔和であり、義に飢え渇き、憐れみ深く、心が清く、平和を実現し、義のために迫害される、そのような人たちに対して、「幸いだ」と語られるのです。そしてそのような人たちは、天の国が与えられ、慰められ、地を受け継ぎ、満たされ、憐れみを受け、神を見、神の子と呼ばれると約束されます。その具体的な言葉については、いろいろな解釈があると思います。ただ今日は一つだけ、「憐れみ深い人々は、幸いである、その人たちは憐れみを受ける」という言葉に注目したいと思います。

憐れみという言葉、日本語にするとそこには、「不憫に思う、同情する、気の毒に思う、慈悲の心をかける、恵む」といった意味になります。感情的なものです。聖書の中でも、そのような意味で使われることも多くあります。でもそれだけではないのです。誰かがとても悪い状況になっているのを見たときに、心の中に抱く同情、共感というもの。そしてそれに加えて、思いだけではなく、おこないも伴ったもの、それが聖書のいう「憐れみ」なのです。

能登で何を大切にしてきたのかと聞くと、「食事」だそうです。肉体労働や清掃など、そのように目に見えて改善していくことも確かに大事でしょう。しかしそれ以上に、一緒に食卓を囲むということ、そのことこそが、「一緒に生きている」ことを示す、憐れみの行為だということではないでしょうか。

わたしたちはこうして教会に連なり、共に生きています。その中で神さまから与えられた大きな憐れみを受け、そしてその憐れみを周りの人たちと分かち合い、歩んで行けること、本当に感謝なことだと思います。あわせて本日の代祷で覚えるたくさんのわたしたちの愛する信仰の先輩たち、またこの名簿にはない皆さんが心に覚えるお一人お一人が、今も神さまの憐れみの中に憩わされ、平安におられることを喜びたいと思います。

「幸いだ、あなたがたは」。そのイエス様の言葉は、わたしたち一人ひとりに向けられています。その幸いを、どうぞ周りの人たちと分かち合い、共に歩んでまいりましょう。

最後になりますが、今年の信徒の集いの献金などを、教区の災害支援室、能登のためにおささげすることができました。これからもわたしたち、能登のことを心に留めていくことができればと思います。